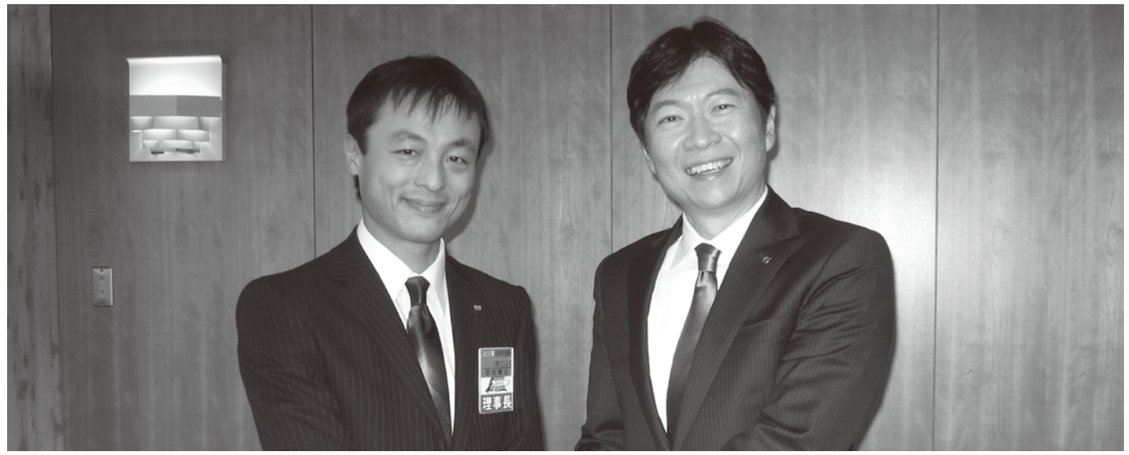
新春岡山県知事対談

岡山県知事　伊原木 隆太 × 第64代理事長　鈴森 賢史



鈴森理事長：新年あけましておめでとうございます。本日はお忙しいところありがとうございます。知事に就任されて1年余りですが、この1年を振り返っていかがでしたか。

伊原木知事：学生の頃や民間の仕事をしていた頃に比べ、ここまで一生懸命仕事をした1年間はありませんでした。以前であれば1週間かけていたような業務を、現在は1日に何件もこなさなければなりません。しかしながら業務をこなすのは最低限のことであり、その中で県知事伊原木隆太として、新しい発想を持ってどのように岡山県を良くしていくかということが大切だと感じています。皆様から、大変なチャンスを任せていただいたこの4年間を、精一杯頑張って参ります。

鈴森理事長：知事は教育県岡山の復活を掲げていらっしゃいますが、これからの取組をお伺いします。

伊原木知事：教育問題は岡山にとって本当に大事なことだと思っています。かつて教育県岡山といわれていた本県の教育現場は、大きな問題を抱えています。しかしながら、教育がここまで悪化しているにもかかわらず、今まではあまり大きな話題になっていませんでした。そのような中で、JCの皆様が、以前から子どもの教育について非常に熱心に考えてくださっていることは、とても有難いと思っています。

　岡山県は、学校内での暴力行為が2年連続で全国最悪でした。今回の最新のデータではようやく最下位から抜け出しましたが、不登校は40位台です。また、少年犯罪は1000人当たり10 .72人で、この結果は普通の県の倍になります。学力そのものも問題なのですが、生活態度や学校の荒れによって、授業が正常に行われていないクラスが多いことも問題です。こうした危機感を皆さんが共有し、自分たちで何とかしなければいけないと思っていただくことで、問題を解消する力が大きく違ってきます。有難いことに、以前と比べれば皆さんが危機感を持ち、注意や行動を行ってくれるようになりましたので、様々な指標が少しずつ上がってきました。これからもあるべき姿に戻していく取組が必要だと思います。

　私はもっと教育現場に人を入れたいと思っています。普段から学校の先生は忙しい上に、不登校の子供や暴力を振るう子供がいると、その対応で本来の仕事が疎かになりがちになります。しかし、岡山県の一般会計予算の中で教育費は既に4分の1以上を占め、例えば1%増やすだけでも約18億円にもなります。岡山県に限らず、今の都道府県の予算というのは、国が決めた基準に従って市町村が支出をし、県がその負担をする部分が非常に大きな割合を占めているので、硬直化が進んでいます。学力を上げるためにも先生をもっと増やしてください、と言われるのですが、単純に先生の数を増やすことは極めて難しいのです。ですから県では、スクールソーシャルワーカーや、非行防止教室相談員が、いざという時に問題のある学校に対して直ちに助けやサポートができるような仕組みづくりを考えています。手一杯になってしまった先生を、専門的な知識や経験を持っている人にサポートしていただくことは、とても大事だと思います。

鈴森理事長：そのように学校が荒れていくというのは、家庭の問題と繋がっているような気がします。

伊原木知事：家庭に教育する力、躾ける力がないのであれば、本当は先生が怖い存在でいなければならないのに、そうなっていない。以前であれば、先生が生徒を叱る時、場合によっては拳骨が飛んできたりもしました。今では悪質な体罰と同一視されてしまう恐れがあり、愛情を持って叱ることが難しくなっています。非常に心配な状況です。

鈴森理事長：厳しい大人の存在が薄れてしまっている社会の現状は、青少年の教育にとって非常に心配ですね。学力定着状況たしかめテストについては、どのようなお考えで導入されたのでしょうか。

伊原木知事：学年ごとに学力が定着出来ているかを確かめて、改善に役立てるために実施することにしました。国が実施した小学校6年生と中学3年生の学力テストの結果を調べてみると、中学3年生が、小学校1年生から中学校1年生までに学んだことが、しっかり定着出来ていないということが分かりました。今回、小学校5年生と中学校2年生を対象としたテストを導入することにより、岡山県独自で行っている中学1年生を対象としたテストを含め、ようやく小学校5年生から中学校3年生まで、毎年チェックができるようになりました。これでタイミングよく、よりきめ細かい指導が出来るようになると思っています。

鈴森理事長：未来を担う子どもたちに、より良い教育を受けてもらえる環境づくりに期待しています。次に防災、防犯対策についてお伺いします。知事のお考えや今後の課題などをお聞かせください。

伊原木知事：災害が少ないとされる岡山県ですが、水に恵まれている裏返しで水害は意外に多く、過去10年間の被害額をみると、岡山県が47都道府県で10位以内に入っています。防災のため、整備すべきところは粛々としなければいけないと思います。防犯対策につきましても、地域の繁栄に関わる重要な課題です。もっと治安を良くし、もっと教育水準を上げ、安心して通える学校を当たり前にするということが、地域を良くすることだと思っています。

鈴森理事長：観光についてはいかがでしょうか。観光に対する知事のスタンスや、このようにして県外の人も呼びたい、というお話をお聞かせください。

伊原木知事：観光に関しては広告が大事です。工場の誘致や観光客の誘致、県産品の販売等に当たって、岡山の宣伝を行う必要があるのですが、広告宣伝費の額が少なくて驚きました。岡山県の観光収入約1400億円に対し、広告費に当たる観光予算は約0 .1%程度に過ぎません。私は観光予算を倍にしても使いすぎではなく、岡山にとって随分良いお金の使い方が出来ると思います。

　行ってみてがっかりするような観光地だとPRしてもあまり意味がありません。しかし、岡山に来られた方は「きれいなところもあるし、ご飯もおいしいし、いい所だね」と言う方がとても多いのです。ぜひ広告宣伝経費を増額し、多くの人を呼び込むようにしたいと思います。

鈴森理事長：具体的には、どういった観光PRを目指していらっしゃいますか。

伊原木知事：様々な観光地がそれぞれ違う魅力を持っていますが、各地の皆様には、ご自分で良いと思っているものに、もう1つ何かを足していただきたいとお願いしています。例えば、きれいな景色は他県にも外国にもたくさんあります。多くのライバルがいる中で、来る理由、もしくはリピーターとしてまた来てくれる理由が必要です。それは古い建物、素晴らしい景色だけではなく、景色と食べ物、食べ物とイベントなどの組み合わせ、もしくはそれらの総合力です。そこをぜひ磨いていただきたいと思います。

鈴森理事長：どちらかというと、ハードというよりはソフト面でということですね。

伊原木知事：ハードを新しく作ること以上に、今ある物をどう生かすかが重要だと考えます。その一つの方法として、県外から観光にいらした方々の声を聴いていただきたい。岡山に住んでいる方は岡山のことを一番よく知っているはずなのですが、実は特有の魅力に気付かず、それが当たり前という感覚になりがちです。ですから、県外から来た人がびっくりするおいしさ、びっくりする景色という感動体験や意見を大事にしていただきたいと思います。

鈴森理事長：私ども岡山青年会議所は、公益社団法人格を取得して1年半ぐらい経ちますが、これからもしっかりとまちづくりに取り組みたいと思っています。まちづくりといっても我々にできることは限られているので、まちづくりが出来る人材を育てるということを、最大の目的としたいと考えています。最後に、知事が我々JCに期待することがございましたら、ぜひお聞かせください。

伊原木知事：私は、いつか公共のために役立つ仕事をしたいと思っていましたが、この立場になり、公共だけでは出来ないことがたくさんあると気付きました。個人として、また組織としてのボランティアはとても有り難く思っています。中でも、JCの皆さんのように、人が集まり切磋琢磨しながら、また別の地域のJCと交流をしながら、まちづくりやまちの賑わいのために頑張っている組織は貴重です。JCでは、「うらじゃ」をまちづくりのために始めて、今のような大きな存在に育てるという素晴らしい実績をお持ちです。JCの皆様は、ぜひこれからも頑張っていただきたいと思います。

鈴森理事長：ありがとうございます。うらじゃも20年を迎え、我々だけでなく、岡山市や、ボランティアの方と一緒になってやっていくお祭りになっています。我々としてはこういう形を今後も続けていきます。これからもそういったところで我々の役割があり、お声がけいただければ頑張って馳せ参じますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

COLLABORATION
DANRYU 2014 VOL.1